

氏 名 草原 孝典

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第 277 号

学位授与の日付 2023 年 3 月 24 日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 キビ地域の集落と首長墓の変遷からみた集団関係に関する研究

論文審査委員 主 査 松木 武彦

日本歴史研究専攻 教授

上野 祥史

日本歴史研究専攻 准教授

高田 貫太

日本歴史研究専攻 教授

重藤 輝行

佐賀大学 芸術地域デザイン学部 教授

若林 邦彦

同志社大学 歴史資料館 教授

博士論文の要旨

氏名 草原 孝典

論文題目 キビ地域の集落と首長墓の変遷からみた集団関係に関する研究

本研究は、中部瀬戸内地域に位置し、岡山平野を中心として地形的な完結性があり、しかも遺跡の分布密度が高いキビ地域の集落と首長墓から集団関係の変遷を観測して、狩猟採集社会へ水田稲作が伝播し、農耕社会が形成され、首長が出現し、7世紀後半には律令国家が出現する過程を地域史の視点で再構築したものである。

まず、水田稲作が伝播した時点の集団関係を、狩猟採集民と農耕民の生活サイクルの相違から説明する。北部九州では、縄文時代晩期後半の突帯文期に水田稲作が開始されている。しかしながら、キビ地域では同時期の確実な水田遺構や、竪穴建物が認められる安定的な集落は見つかっていない。そのため、突帯文期は狩猟採集の時代であったと考えられる。キビ地域の大半を占める岡山県の縄文集落は、南部平野部と北部山間部に分布が偏る。北部では落とし穴が分布し、石鍬の出土比率が高い。落とし穴は獲物の腐敗が遅い冬季の狩猟に、石鍬は秋季に採集する根茎類を中心に用いられたと推測される。それが集落分布と関係していたとすると、春季から夏季までが主に南部、秋季から冬季までが主に北部に居住していたことになる。一方、農耕民は秋季から冬季に開墾を行うことができれば、効率的に移住することができる。それは狩猟採集民が北部に偏在していた時期であり、南部平野部で水田稲作を円滑に開始することができた諸条件の1つであったと考えられる。

弥生時代前期から後期の集落変遷と水田開発の進展は、統合的に説明することができる。弥生時代前期は、土器の変遷から狩猟採集民と農耕民が並存する期間があり、それに水田経営に失敗した農耕民も加わり軋轢が生じ、環濠集落も出現するが、低位部の水田開発に向かうことによって集団間は再編され、大規模な中期集落が形成される。しかしながら、低位部に特化した水田経営は脆弱である。排水不良や洪水等によって水田域の縮小や喪失が生じやすく、そのため大規模集落といえども短期間で解体する場合が認められる。ところが中期末になると、丘陵裾部の扇状地状地形などで小規模でも洪水等の影響を受けにくい水田開発がすすむ。後期には、それを維持しながら低位部の水田開発を行ったことで水田経営が安定し、集落数が増加した。さらに、拠点集落も出現し、その周辺には中小規模の集落が分布する。集落間の面的関係、すなわち地域社会が形成される。背後の丘陵上には、墳長80mにも復元される首長墓が築かれており、生産基盤の安定と求心的な集団関係、そして首長の顕在化は連動していると考えてよい。ただし、キビ地域の中核地である岡山平野は複数の河川流域によって構成される複合的な平野であり、河川流域ごとに単位地域が形成されている。また単位地域内、あるいは単位地域間では、集落の結合範囲や求心性が異なっており、首長墓の規模もそれに比例する傾向が認められる。

古墳時代は、首長墓の築造が活発化する。したがって、首長墓の築成から集団関係を分析することが有効である。キビ地域で墳長が100mをこえる大型古墳は、岡山平野にしか認められない。しかも古墳時代前期では、最も遺跡密度が高い旭川流域と足守川流域で交互に、しかも継起的に築かれている。また大型首長墓が築かれると、周辺では中小規模の

首長墓が認められなくなる。2つの単位地域が合同することによって、大型首長墓に集約される集団関係が形成されたと理解される。それは、生産関係よりも政治的諸関係によって結ばれた集団といえる。ヤマト王権も、奈良盆地と大阪平野の集団が中心となって成立したとされている。ヤマト王権とキビ中枢地は、集団の統合原理が共通する。中期になって、大王墓と同規模の造山古墳が築かれていることは示唆的である。

一方、首長墓、小型古墳ともに後続する古墳の規模縮小や途絶などが普遍的に認められる。集団関係の基本構造が、共通していたことを反映している。小型古墳の造墓集団は、自立的な生産単位であったと推測される集落とも対応させることができる。したがって、古墳とは様々な規模の集団が、墓制を共通する社会的関係で並列的に分布していたことを示していると考えられる。

古墳時代中期後半、西暦5世紀後半になると、キビ地域はもとより列島各地の首長墓が縮小する。大王墓も例外ではない。その一方で、小型古墳が密集する古式群集墳が認められ、小型古墳や中小首長墓が顕在化する。その中には、ヤマト王権との直接的な関係を示す舶載鏡や帯金具が副葬されているものがあり、キビ地域の中心的な首長墓に近接して築かれている場合もある。それらは造出付円墳や円墳などで前方後円墳ではないことから、地域首長の下位に、ヤマト王権と結ばれた中小首長や小集団が存在していたことを示している。図式的には、ヤマト王権→地域首長→中小首長、小集団とする重層的な集団関係が形成され、ヤマト王権の地域支配が進展しているようにも見える。しかし大王墓も縮小していることから、実際は大王と地域首長が相互に中小首長や小集団を制約し、小単位に分解しつつあった伝統的社会的再構築を目指した結果と考えられる。ただし地域首長が、ヤマト王権との関係性を有する中小首長や小集団との結びつきを強めれば、ヤマト王権に依存することにもなり、重層的な支配関係の形成へ向かう契機になった。

古墳時代後期、6世紀中葉になると畿内型石室が分布し、令制下の数郡単位ぐらいの範囲にまとまる。しかも、墳長30mをこえる前方後円墳を中心とした序列関係も認められる。ただし、地域首長がヤマト王権の地方官になったことを示しているのではない。6世紀後半には、奈良県の石舞台古墳と同規模の巨石墳を築いており、ヤマト王権に匹敵する政治的諸集団に拡大しているからである。また、同等、あるいは準ずる規模の古墳が各地で認められ、地域首長間の関係が相対化されている。そして6世紀末から7世紀初頭には、在地産石材の家形石棺が、それまで分布していた単位地域の首長墓ではなく、分布していなかった単位地域の首長墓で認められる。首長間の関係性が変動しており、ヤマト王権の介入があったためと推測される。その後、キビ地域の首長墓は総体的に縮小化する。ヤマト王権が地域首長を平準化し、地方官人化したためと考えることが妥当である。

一方、キビ地域における古墳時代中期以降の集落は、7世紀に竪穴建物主体に変化し、しかも棟方向を合わせる規則性も認められる。鉄滓などが出土することから、生産単位を基本として編成された計画村落で、地域首長が地方官人化した時期から認められる。地域首長は、ヤマト王権に服従することによって、集団成員との間で支配関係を構造化することができたのである。その後、8世紀になると、住居である屋と倉の床面積が規則的な関係となる集落が認められるようになる。屋は居住人員数、倉はそれに比例した徴税数量を示していると考えられる。律令法に規定された公民が、編成されたことを反映している。

以上のように、キビの地域史で列島の国家形成過程を説明することができるのである。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 草原 孝典

Title
論文題目 キビ地域の集落と首長墓の変遷からみた集団関係に関する研究

本論文は、キビ地域（現在の岡山県と広島県東部を主とした地域）を対象として、縄文時代から古代、なかでも弥生時代から古墳時代までを中心とする集落と墓の変遷過程から集団関係とその変化を分析することによって、国家形成に向けてのキビの地域史を考古学的な視点と手法によって叙述したものである。

第Ⅰ章から第Ⅲ章までは、立論の理論的・方法的前提の提示である。まず第Ⅰ章「集団論の展開と社会形成過程の議論」では、分析と叙述のための視点と方法について、主に対象とする遺跡を集落と首長墓に絞り、そこから復元できるのは集団関係であることを明示するとともに、対象としての吉備地域の歴史的特性と分析対象としての有効性を強調する。第Ⅱ章「社会形成・兼用家庭におけるキビ地域の史的意義」では、日本列島におけるキビ地域の歴史的特性を、主に近畿（中央）との関係を軸に学史も踏まえつつ整理して分析視点を具体化し、第Ⅲ章「キビ地域の歴史的空間（空間・時間）」では、作業のための分析基準および空間的・時間的枠組を定める。

第Ⅳ章から第Ⅵ章までは、主として弥生時代を対象とした分析である。第Ⅳ章「水田経営社会の成立と変容」では、弥生時代に先立つ縄文時代の集団関係の展開を、キビの南北両地域の空間的關係の中で捉え、そこへ水田稲作が受容されるプロセスの具体像を復元する。第Ⅴ章「弥生集落からみた単位地域の形成過程」では、弥生時代の集落の分布の変遷と、それを構成する竪穴建物の分析から、キビの諸地域のうちでも中核的な存在となる旭川流域と足守川流域の比較を軸として集団関係の展開を追い、両地域の石器と金属器の出土状況から両者の歴史的性格を比較する。第Ⅵ章「生産と流通からみる（単位）地域間関係の変遷」では、第Ⅴ章で抽出した旭川流域と足守川流域の比較軸に沿って、石器の分布や様態および手工業生産遺物の分析から、それらを統括する首長が出現する過程と、その両地域での様相の違いを浮き彫りにしようとする。

第Ⅶ章から第Ⅹ章までは、主として古墳時代を対象とした分析である。第Ⅶ章「首長墓の登場と古墳時代前中期のキビ地域」では、まず土器の編年を軸に近畿（大阪平野・奈良盆地）との時間的併行関係を整理した上で、大型古墳を中心にした首長墓と、それを核にした集団関係の展開を明らかにする。第Ⅷ章「古墳時代前、中期の集団構造」では、上記の展開をさらに詳しくみるべく、足守地域を対象にして小型古墳の展開をあとづける。第Ⅸ章「首長の存在形態の転換」では、古墳時代後半期を対象に、横穴式石室を軸とした首長墓の分析とそれらに副葬された馬具の検討から、キビの諸集団が近畿（ヤマト王権）の集権化のもとに統合化されていく過程を叙述する。この過程を集落の側から分析したのが第Ⅹ章「集落形態の変革の変遷とその画期—古代吉備における2つの画期—」で、生産関係と集団編成という二つの画期を経て、キビの諸集団が国家的関係の下へ統合されていく

状況を描写する。

最後の第XI章「キビ地域の社会構造と列島社会の変革」では、前半において各章で展開してきた集団関係の変化を概述し、本論によって立つ集団関係の、既存の一般理論では捉えきれない複雑さを強調する。その上で改めてキビ地域の地域集団の変遷過程を1～10の段階に分けて具体的に叙述し、日本列島史の中に位置づけようとするとともに、日本固有の集団論へとさらに理論的に深化させていく展望を示した。

以上のような本論文の内容に対して、審査委員会はおおむね次のような総合的評価を共有した。まず、全体として本論は、キビという地理的・歴史的空間を対象として考古学による通時的な歴史叙述を試みた意欲的な作業である。さらに、集落と首長墓を両軸に各種の考古資料を総合し、集団関係ならびにそれをめぐる生産や流通という横の方向と、階層化という縦の方向から、国家形成に向けての社会の変化を総合的に論じた点は高く評価できる。とくに、こうした社会の変化を、個人の仕事としては驚嘆すべき多くの資料を集め、独自の分類・編年および数量的分析から実証的に導き出したことは特筆でき、これまでも研究の蓄積がある吉備地域の考古学を前進させたといえる。

一方で、下記のような意見も出た。まず、対象としたキビという地域を、日本列島の国家形成史の中の歴史的空間として、他の地域やその研究事例などとも比較しながら、より高次かつ広視野での位置づけを意識する必要がある。それとともに、「機能集団」「小集団」や「首長」など、やや説明不足ないしは考究が乏しいままに用いられている概念を、徹底した研究史の検証も通じてさらに深化させる余地がある。そうすることによって、本論では年代論も含めてやや分析が不足するようにみえる対外関係の歴史的評価や、律令国家をゴールとする既存の歴史観からの新たな発展も射程に入れることができると思われる。さらに、とくに弥生時代の集団論において進みつつあるパラダイムの転換、環境を重視した新たな歴史像の構築など、考古学・歴史学の中で進みつつある近年の展開に対する立場や姿勢をさらに明確に意識することによって、方法や理論という見地からも本論の内容をより充実させられよう。

このような、今後改善や充実を図るべき点はあるが、全体としては前述のように高く評価される内容であることは審査委員の間で異論がない。以上の理由により、審査委員会は、本論文が学位の授与に値すると判断した。